続 文化は、今に生きる

ソグドの人々

深澤芳樹

法隆寺献納宝物に、白檀の香木が二本ある。そしてそれぞれに、刻銘、焼印、墨書がのこる。これを調査した歴史学者東野治之さん（『香木の銘文と古代の香料貿易』『遣唐使と正倉院』岩波書店）は、刻銘は古代ペルシア語のパフラヴィー文字、焼印はソグド文字だったこと、墨書は書体と年号から七・八世紀の日本のもので、その舶載が天平宝字五（七六一）年以前であったこと、これらの事実から、経路は熱帯アジア原産の白檀が、ペルシア人やソグド人の中継貿易により内陸か南海を経由して中国にいたり、そこから法隆寺に達したこと、をつきとめた。

では、中継貿易にかかわった、ソグド人とはいったいどんな人々だったのだろう。

その故里は、ウズベキスタンとタジキスタン。そこは五〇〇〇m級の山々にはさまれた乾燥地帯に、大河ザラフシャン川がながれる、穀物、野菜、それに葡萄など果実のゆたかな地。ここがソグドの地、ソグディアナ。ここからベダル峠を越えれば、タクラマカン砂漠。ペルシアと中国をむすぶ東西の大動脈がそこにあった。

中央アジア出土の文献などを研究する吉田豊さん（『ソグド人の美術と言語』臨川書店）によれば、ソグドの名は、アケメネス朝ペルシアの王ダレイオス一世（在位前五二二～四八六年）の碑文にペルシアの属州の一つ、sug(u)da としてはじめてあらわれる。ヘロドトス（前五世紀）の『歴史』には、sogdoi とある。古代イラン語資料『アヴェスター』は、最高神アフラマズダーが創造した国々として、ゾロアスター教徒の理想郷 Airyana Vaejah についで二番目にソグドをあげる。

前三二九年アレクサンダーがその主邑マラカンダ、今のサマルカンドを制圧する。そしてその地の娘、ロクサネと結婚する。きっと色白で彫りが深く、巻毛で碧眼の美しい女性だったろう。

六三〇年に、玄奘が見たその地は、ザラフシャン川の潅漑で、農地はゆたかで、都市には貴族、商人・職人が住み、諸国の産物が集まり活気にあふれていた。

タジキスタン・ペンジケント遺跡では、多くの邸宅から、美しい極彩色壁画が見つかった。当時のソグドのゆたかで自由なオアシス都市の空気を、今に伝えている。

さて、古代ペルシアの碑文に、スーサの宮殿を飾るラピスラズリと紅玉髄は、ソグド人がもたらしたとある。

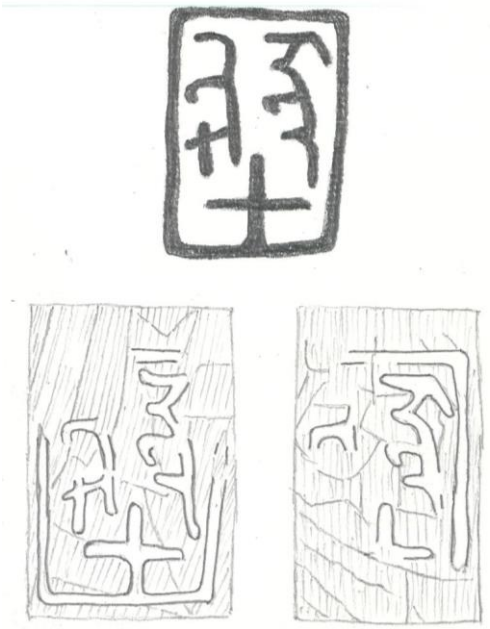
敦煌では、四世紀にさかのぼるソグド文字の手紙が八通見つかっている（『NHKスペシャル文明の道③』NHK出版）。そのなかに、「胡椒二五〇〇を送る準備が整いました。これから楼蘭まで絹を買い出しに出かけることにしています」、とあった。六世紀中国の歴史書『周書』に、「吐谷渾の外交使節団をとらえてみたら、なんとそのなかには胡商（ソグド人商人）二四〇人、駱駝六〇〇頭がいた。そして、生糸、絹は万をもって数える」とあった。また隋唐時代では、タクラマカン砂漠の北東に位置する高昌国故城で売買文書が見つかり、その八八％の取り引きにソグド人がかかわっていた。

日本史学者福島恵さん（『東部ユーラシアのソグド人』汲古書院）によれば、ソグド人はペルシアと中国を行き来しただけではない。渤海にも、南シベリアをとおる「黒豹の道」が通じていて、ソグド人がその交易路としていた。

また鑑真がいた龍興寺のある揚州は、当時唐第一の物流の集散地、ソグド商人が多く集まる港街だった。唐招提寺の四代目住職安如宝は、鑑真にしたがって来日したソグド人僧であった。

ソグド人は、広大な交易ネットワークで、世界各地の物と知をはこんだ。正倉院宝物には、きっと遣唐使がソグド商人から手に入れた物が紛れこんでいる。

（天理大学客員教授）



単価と十字形飾りからなるソグド文字の焼印（復原（上）と香木部分（下））東野治之著『遣唐使と正倉院』から（深澤芳樹写）